

がたモニタリング

第5号

2011年9月20日発行
認定NPO法人生態工房
167-0054 杉並区松庵3-38-14-2D

がたモニとは？

がたモニは、江戸前・三枚洲の干潟を守る市民参加の楽しい活動です。干潟の生きもののモニタリング（定期調査）、生きもののすみかを守る野外作業、干潟の生きものを知る観察会などを通して、三枚洲の自然に親しみ、未来へと伝えていきます。

三枚洲を知っていますか？

東京湾の豊かな自然を回復させるために整備された東なぎさ、西なぎさの人工干潟は、東京湾で残り少ない干潟として、大切な生物のすみかになっています。その沖合にひろがる自然の干潟・浅瀬が『三枚洲』です。干潟の沖合への張り出しは、1.5kmにも及び、湾内で最大規模。荒川と江戸川が注ぎ込み、貝類、魚類などの産卵・生息地としてさまざまな生きものを育てています。日本に渡来するスズガモの約3割、20,000羽が越冬するほか、キョウジョシギなど多数のシギ・チドリ類が生息しています。三枚洲は「東京湾の干潟・浅瀬」として環境省「日本の重要湿地500」に選定されています。



2011年春から夏 がたモニリポート



◎生きもの調査 2011年6月5(日)実施

干潟の環境変化を知るため、生きものの生息状況を継続的に調査しています。今年も市民と専門家と一緒に調査を行いました。今回の調査では、オサガニ、アラムシロ、シオフキなどの出現率が高いこと、全国的には少ないオサガニが西なぎさには豊富に生息していること、希少なムロミスナフミナナフシが見られること、外来種のホンビノスガイが侵入しているがまだ少ないことなどがわかりました。

◎干潟を知ろう-自然観察会 干潟の自然に触れ、親しむ夏の干潟の観察会を行いました。



初夏の干潟の観察会(5月21日)、干潟の生きもの観察会(10月15日)

干潟の観察会は、干潟ってどんなところ？ どうして生きものがたくさん棲んでいるの？といった不思議を、観察を通して解き明かしていきます。中でも泥掘りは干潟観察の醍醐味の一つ。何もいらないような泥の世界にも、ゴカイやアサリの稚貝がなど、いろいろな生きものの発見や、生きものの習性を理解することで間近に自然な行動を見がみられる場面もありました。新しい発見がいっぱいでした。

カニカニ観察会、パート2(6月18日、9月3日)

観察地への道を進むと、さっそくクロベンケイガニが歩いていました。人の姿に驚いて、岩の隙間や巣穴に逃げ込みます。ヨシ原の水際の地面はカニの巣穴だらけ。よく見るとかなり大きなカニもみられました。ひとしきりカニ捕りで盛り上がる参加者一同。クロベンケイガニ、ベンケイガニ、アシハラガニと、ひととおりの種類を観察。その後専門家から、オスとメスの見分け方、カニのふんどしの開け方など、カニのヒミツを聞きました。



干潟のトビハゼ観察会(7月2日)

トビハゼは潮が満ちてくると、水切りのように水上をピョンピョンと連続ジャンプを見せてくれる、とても個性的な生きもの。このトビハゼの餌や子育て、暮らしを、実際に間近で観察しながら学びました。東京湾はトビハゼの生息域の北限です。トビハゼの棲む干潟環境をまもって行きましょう。

夜干潟の観察会(8月6日)

普段見ることのできない夜の生きもの観察を行いました。暮れ時、ねぐらに帰ってくる鳥、活動をはじめる夜行性の生きもの観察、干潟のカニたち、遠くから聞こえるアオサギの鳴き声など、音も楽しむ観察会でした。

鳥の足形標本づくり(8月28日)

浜辺の足跡をみつけてどんな鳥かな？と考えるのはとても楽しいです。標本づくりは、干潟に残された水鳥の足跡を石膏で型どりをして行いました。石膏が乾くまでの間は、足跡をたどって、鳥たちがそこで何をしていたのかを観察したり、普段は見ることもない鳥の足の裏を見たり、興味が尽きない観察会でした。

